出雲

良いご縁をさずかりに。

明治23年、初めて出雲大社を訪れた小泉八雲ことラフカディオ・ハーンは、その感慨を「出雲は、わけても神々の国」と記しています。雲間にわけ入るかのように高々と天に結ぶ千木をいただく御本殿の威厳あるたたずまいはもとより、境内全体を包む凛とした気配や、八雲山から弥山へと連なる鬱蒼とした深い森の放つオーラも含めて、異邦人であるハーンにも見えざる神々の存在を感じさせたのかもしれません。神在月（旧暦十月）には全国八百万の神々がここに集まって、男女の縁などについて会議をされることから、結びの神様として知られる出雲大社。良いご縁がありますようにと、拍手を打ち、お願いする参拝の人々で賑わいます。

出雲大社神楽殿正面にかかる長さ約13.5m胴回り約9m重さ約5トンの日本一の大注連縄。

出雲神話の主役、大国主大神を祀る

出雲大社御本殿（いずもおおやしろほんでん）

「古事記」「日本書紀」によれば「大国主大神」の国譲りに際して、底つ磐根に宮柱を深く立てた壮大な宮殿を造られたのが出雲大社の始まり。現在の御本殿は延享元年（1744年）に造営されたもので、高さは24m。昭和27年（1952年）国宝に指定されています。

出雲大社拝殿（御仮殿）

銅鳥居をくぐると正面に建つ桧造り、高さ13.5mの拝殿は昭和34年（1959年）に再建されたもの。銅鳥居の下の中央に立つと、拝殿が左にずれていることがわかります。これは御本殿の御屋根を拝することができるようにと配慮されているからです。
現在、平成の大遷宮の為、大国主大神様の仮のお住まいとなっています。

天に聳える大神殿の伝承を解き明かす発見

巨大神殿遺構

平成12年（2000年）に出雲大社の境内から巨大本殿の柱の一部と見られる遺構が出土しました。3本が一組となった柱の遺構で千家国造家所蔵「金輪御造営差図」に描かれている図と極めて類似するもので、「古代の巨大神殿」の存在を解き明かす鍵となる大きな発見となりました。出土した柱は古代歴史博物館に展示されています。

ここでは二拝四拍手一拝

出雲大社での参拝

神社参拝の作法として、一般には「二礼・二拍手・一礼」ですが、出雲大社は、「二礼・四拍手・一礼」です。

【一口メモ】
～4つの鳥居をくぐってご参拝～
出雲大社へご参拝の際にはまず、神門通りの大鳥居～勢溜の正門鳥居～下り参道の先・松並木の参道の鳥居～最後に拝殿前の銅鳥居の4つの鳥居をくぐります。

松並木の参道

勢溜（せいだまり）から参道を下り、祓社（はらいのやしろ）に手を合わせ、祓橋（はらいのはし）を渡ると、中天にそびえる老松の並木が荒垣付近まで続きます。

大鳥居

神門通りの宇迦橋（うかはし）のたもとに高大にそびえたつ大鳥居。高さは出雲大社御本殿より少し低い23mとなっています。

平成の大遷宮

本殿遷座祭平成二十五年五月（予定）

現在の国宝御本殿は、延享元年（一七四四）に御遷宮御造営され、以来、文化六年（一八〇九）、明治十四年（一八八一）、昭和二十八年（一九五三）と三度にわたり御遷宮御修造が行われてきました。そして、このたび、約六十年ぶりに「平成の御遷宮」が行われます。